

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

編集される薬品会の知 『文会録』と『赭鞭余録』 を中心に

著者	川? 瑛子
出版者	法政大学大学院
雑誌名	大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
巻	70
ページ	49-57
発行年	2013-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/7845

編集される薬品の知

—『文会録』と『楮鞭余録』を中心に—

社会学研究科 社会学専攻

国際日本学インスティテュート

博士後期課程3年 川崎 瑛子

1. はじめに

本草学とは自然のあらゆるものを薬物として認識し記述する学問である。それは中国で誕生し、日本に渡った。そして一八世紀の日本では本草学は薬草の学という制限を越えて、自然をあるがままに観察し、記述していく学問へと発展を遂げていくことになる。その発展の中で薬品会と呼ばれる学者同士の会合が始まった。

薬品会とは薬効の有無に拘ることなく全国から珍しいモノを集め、その真贋や産状、名称をめぐって質疑応答を繰り返し、情報を交換し合う会のことであるとされている¹。

出品者と出品物の明確な記録が目録として残されている最初の薬品会は宝暦7年（1757年）7月に田村藍水によって開催された会である。その後、薬品会は江戸だけではなく、大坂や京都、熊本、尾張、伊勢など全国に渡って幕末まで行われるようになった。

大坂で初めて薬品会が開催されたのは宝暦10年（1760年）4月15日であり、会主は戸田旭山である。この会の出品者は101人、出品数は208品（重複品を引けば191種）と、それまで行われてきたどの薬品会よりも出品者、出品数共に多い。また大坂と京だけではなく、江戸や長崎、明石や讃岐といった非常に広範囲に及ぶ地域と人物から出品が集まっている事が分かる。旭山の薬品会は全国に渡る出品と参加者が確認できる最初の薬品会である。

また旭山は薬品会を開催した1ヶ月後に『文会録』と題した薬品会の解説目録を出版した。江戸の藍水一門も3回に渡って開催された薬品会の出品物と出品者の名を纏めた『会薬譜』を発行するが、『文会録』は出品物と出品者の名をただ羅列するだけでなく出品物に対する解説まで記載されている。『文会録』とはただの目録ではなく、薬品会の歴史上で初めて出品物の解説と批評が確認できる本である。

『文会録』が発行された1年後の宝暦11年（1762年）4月15日に、豊田養慶によって初めて京都で薬品会が開催される。この会は全国から出品物が集まったわけではない。しかし養慶も宝暦11年秋に『楮鞭余録』と題した薬品会の解説書を発行している。

藍水一門によって江戸で開かれた薬品会は宝暦7年から宝暦12年にかけて5回行われた。その後、薬品会に出品された総計二千余種の中から重要なモノや珍しいモノを厳選し、それに解説をつけた『物類品隲』という解説目録書が宝暦13年（1763年）に出版された。『物類品隲』は『本草綱目』の分類法を踏襲したうえで出品物を解説しているが、引用文献は『天工開物』、『物理小識』などの中国古典や『和名抄』、『古今六帖』などの日本古典にまで及ぶ。その中には日本各地の本草学者や医師、蘭学者、長崎通詞、農夫など非常に多くの人物が登場し、彼らの薬品会以前の経験も記述されている。その為、『物類品隲』は江戸時代の学問と知の伝搬を考察する上で非常に良き資料を提供してくれるものである。

その為『物類品隲』以前に出版された『文会録』や『楮鞭余録』は、『物類品隲』の影に隠れてこれまで注目されてこなかった。だが薬品会で得た知を解説し、編集するという活動は『物類品隲』へと至る道程として見逃せないものである。

本稿は『文会録』と『楮鞭余録』から薬品会を経験した人物らがいかに知を記述し、編集しようとしたのかを分析するものである。それはこの2冊が持つ歴史的な意義を再評価することへと繋がっていくだろう。

2. 『文会録』が編集する知

2.1 序文が語る薬品会の意義

『文会録』²の本文は絵入二十一丁であり、その内の十丁が序跋に充てられている。そして旭山が薬品会の開催に先駆けて全国に配布した「薬品会請啓」と薬品会の規則を明文化した「会例」まで『文会録』には掲載されている。

まず「会例」の記述をみていく。旭山の薬品会の「会例」は七カ条に及び、旭山の直接の知人でなくとも希望があれば出席が可能であること、しかしたとえ知人であっても必ず出品したうえで出席すること、重複などの調整をしたいので出品者は一日でも早く品物の名と自身の名を知らせてほしいこと、当日俄かに出席不可能となった場合でも出品だけはしてほしいこと、そして出品物については列座の衆で互いに真偽を「質し明め」「衆評の上」名を決定したいなどの細かい規則と会当日の大まかなビジョンを説明している。

旭山は薬品会を友人同士のような限られた関係の中で行われる馴れ合いのような場ではなく、一定の秩序と規則に則った上で執り行われる緊張感のある学際的な「場」として設定していることが分かる記述である。

次に「薬物会請啓」ではまず藍水と源内が会主となり江戸で行った薬品会の紹介をしている。その結果を旭山は「嗚呼盛ナル哉」と感嘆し、評価した上で、「敢方今吾浪花比可不雖東都之隆盛並亦是本邦二三大都會ニテ而儒醫百工其人乏不」と江戸に及ばずとも大坂もまた本邦で二、三の大都会であり、儒医百工の数も負けていないと大坂を誇る。

これは旭山個人が大坂という大都市に対して常に持っていた誇りかもしれないが、「広告」という側面から考えると今まで江戸でのみ開かれていた薬品会を大坂でも開催する事に対して説得力を持たせようで参加への情熱を掻き立て、且つ上方で初めて開かれる己の薬品会の格を江戸と比べて見劣りさせない為の一文であるとも考えられる。

しかし「薬品会請啓」の最後には「寒陋棄不各薬用充可者一二種携」と、取るに足りないと思ったものでも持ってきて欲しいと付け加えられており、集まるモノの質には旭山は拘っていない。江戸よりも良質なモノを集めた薬品会を開催するつもりはなく、あくまでもできるだけ多くのモノの真贋を参加者らとの質疑によって解明し、知を得ることに旭山の目的があることが分かる。

旭山は『文会録』の序文で版元から会に集められた主客の品目を「四方ニ諸ヲ公ニセント」と持ちかけられた為に『文会録』の出版を「予之ヲ許」したと述べている。どこまでが事実かは分からないが、旭山の薬品会はその開催までの準備段階からその結果に至るまで「四方」に公にすることを求められるほど革新的で画期的な催しであったと言える。

『文会録』に収載された旭山の序文では「君子以文会友以友輔仁」と『文会録』の題名の所以を『論語』の一文を引用することでまずは記述している。薬品会が仲間を集め、集まった仲間によって「仁」を追究する場であることを旭山は題名でもって主張していることが分かる。

そして旭山は天の文を日月星辰虹霓雲霧雨露霜雪とし、地の文を山海原野金石鳥獸虫魚草木、そして人の文を君子の文としたうえで「夫レ天地人之文、各々其ノ趣ヲ異ニスト雖モ、文ノ文為ルハ一ノミ」（原文は漢文）としている。この「文」とは朱子学の哲理である。それに加えて「仁」という言葉が飛び出し、また「文会」という『論語』の概念も持ち出すなど、非常に思弁的な方向から旭山は序文を開始し、薬品会の目的を記述しようとしている。

旭山は「薬之物ト為ル上ハ、雨露霜雪ヨリ下ノ虫魚草木ニ至ルマテ一モ用イヅ無シ。イヅクンゾ即今、此ノ会ヲ設クルヤ敢エテ仁ヲ輔ルノ謂ニアラザルトイエドモ、マタナンゾ吾ガ仁術ニセザルカ」（原文は漢文）と自然界の「文」を探究することこそ仁への道であり、その手段の一つとして薬品会を開催したと記述する。朱子学的理論を持ち出しながら自然探究の意義を語り、薬品会の価値を位置づけているのだ。旭山には薬品会の意義を朱子学という御用学問の価値観を引用し、「仁」の追求の一手段として強調する必要があった。

『文会録』で旭山の薬品会の出品物を確認すると、無名の石や仏法僧、駝鳥の卵の殻など薬材とは思えないモノが多数出品されている。「薬」という概念に代表されるように実利的な知の探究の場として薬品会が開催されるのならば、旭山が朱子学的な理念を持ち出して薬品会の意義を主張する必要はない。この旭山の一文は

本草学の知の探究には「薬用」となるような実用性が求められていた世相に対して薬品会が抱えていた矛盾と葛藤が垣間見える。

『文会録』に収載された「会例」と「薬品会請啓」からは、藍水一門の活動に刺激を受けた旭山が、更に多くの出品物と人の知を全国から大坂に集めることで「モノ」の実態を解明する学術の場として薬品会を開催し、規定しようとしていることが分かる。そして序文の記述からは従来の思弁や概念に惑わされる事無く「モノ」をテキストとして実際の自然を純粋に解説しようとする薬品会が、如何に本草学にとって画期的な催しであったかが伺える。

2.2 過去の知との邂逅と更新

『文会録』に登場する古典は『本草綱目』『閩中海錯疏』『桂海果志』である。特に『本草綱目』からの引用が多く、天茄が「上二図スル所ノ形状本綱牽牛子集解と吻合ス」と解説されているように旭山の薬品会では『本草綱目』を知の下敷きにしながら議論が進んでいた。

しかし『本草綱目』の記述が如何に正確であるかを旭山は知ろうとしているのではない。赤箭天麻は、半丁以上に渡る解説が為されている。その解説の内容は、まずは関東が主な産地であるということ、根の形は玄参に似ているが、玄参とは根の色が異なる事を通常時と干した場合の両方の状態などで比較して玄参とは似て異なる赤箭天麻の実像を露わにしていくな。その他に根や茎の状態や形状、そして長さは二三尺であり節の数は四、五節と具体的に観察する。そして花はハマウツボに似ており、実はずけないとしたうえで、「本草還筒子ノ説」は誤りであると結論付ける。

『本草綱目』の天麻の解説では天麻の茎の中から落下してくるものを天麻子としている。それは異名を還筒子という³。還筒子は天麻の果実であるとされているが、赤箭天麻は「実無」であると薬品会では結論付けられているので、赤箭天麻は天麻子＝還筒子を為す事はできないということだ。

『文会録』では赤箭天麻の外観の形状がつぶさに記され、茎の長さや節の数などを具体的な数値で示している。薬品会では赤箭天麻を「観覧」したのではなく詳細に「観察」していることが分かる。また非常に形状の似ている玄参の根や茎を赤箭天麻の隣に思い浮かべることで互いの異同を論じ、対象の独自性を見出したうえで、古典に記された名前の似た天麻子こと還筒子の記述の真偽の判断にまで『文会録』の記述は至っている。これは古典の再編集であるともいえる。

『文会録』には「時珍諸説引證スル者非ナリ」「先輩決所ノ熊篠ニ非ズ」と『本草綱目』のみならず先人たちの知識を真っ向から否定する解説が多い。『文会録』の記述は実際のモノを観察することで古典の知が更新されたことを示している。

2.3 記述される環境と世界、そして人

天麻の解説の最後には「芝菌ノ類ニシテ年々梅雨ノ候時期ニ関シテ更ニ生スル」とあり、生育の時期にまで『文会録』は言及している。本名未詳とされる薬舗紫苑でも、ハコクサソウの葉に初生の葉が似ており、生えている毛は夏至の後に漸くなくなるとされ、金瘡小草では皺や毛の有無のほかには春夏の間は紫の花を咲かせ、まれに白い花のものがあることも書かれている。その他にも「梅雨ノ頃ニ気ヲ感ジ生スル」蟬花、「初夏中旬ニ長サ二寸余」となる矮菊と、葉や茎、根などの形状のみならず、季節や環境に伴うモノの変化にまで学者らの興味と見識が及び議論が交わされていた事を示す記述が多くみられる。

自然がモノに与える影響を『文会録』は記述する。『文会録』が編集しようとする知とは形状や味などモノ単独の情報だけではなく、自然という外界からの刺激によって起こるモノの変化にまで及ぶものであった。

また早藕という一花一葉の出品物は、山丹に似て鼠毛色である。そして『文会録』の視点は「鼠毛色一般故ニ鼠山丹ト名ツク其餘名義詳ナラズ」と人が使う名称へも向けられていく。

獨根大薊は「根ノ形色気味並ニ牛房根ノ如シ故ニ濱牛房ト呼ビ為ス」と名の由来が解説され、かつ「土人蔬ト為シ食ス香味口に可ナリ」と土地の人々がどのように食べていたのかという経験の知と実際の味まで記されている。

モノに如何に名が与えられ、人と共存していたのかという、モノと人の関係にまで薬品会では議論が及ん

でいた事を示すのは、「本邦ノ貴人往々此物ヲ以テ筋ト為シ菌ヲ固ス」白玉、「此石ヲ以テ一口ヲ鑿開シ鹹水濁水及ヒ酒醋濾ハ皆清水ト成ル蓋奇石也」とされた瀧水石、「熊館ニ生スル所ノ芝ナリ土人取収テ精氣ヲ治ス甚効アリ。衆評ニ曰其形色気味皆エブリコト同シ是而朱崖芝ヲ以テ名ヅクベシ」とされる熊館芝がある。

また国内のみならず、海外のモノに対する現地の人のまなざしと日本人がそのモノをどう解釈していたかまで記述されているのは芡草である、それは「龍宮国ノ人席ニ作ル絶佳」とされ「本邦ニテリウヒト呼為ス者ハ此ノ席也」と解説されている

『文会録』はモノと人が培ってきた関係を、実体験を交えて記述していく。そのモノと人を巡る関係へのまなざしは日本だけではなく、海外の文化にまで及ぶものであった。

また『文会録』では出品物の品質のランク付けにも及んでいる。全ての出品物に対して評価が下されているわけではないが、和産と漢産の二種が出品された天竺黄の解説には「衆評和産ヲ上トス」とあり、薬品会では産地の異なる品が出品された場合に互いを比較し、どちらの方がより優れているかを検討していた場合もあった事が分かる。(もちろん単独で出品されたもので上品、下品の評価が下されている場合もある)。その判断基準だが陽起石では「薬用ニ堪ズ」とあり、檀香梅では「本綱ニ存テ蠟梅中ノ上品トス」と解説されていることから、薬用に成り得るか、もしくは『本草綱目』などの古典の記述を判断基準にし、衆評によって決定していたようである。

その他にも備前岡山の某氏の出品である「磁石」は「衆評ニ曰上品ナリ漢産ト雖モ此ノ者如キ尤稀ナリ」と絶賛されている。『文会録』は参加者による集団討論の活気と高品質なものを見つけた時の高揚感を記述する。また「漢」という場所から産出されたモノに対する信頼と同時に対抗心がモノへの視線の中には含まれていたことも分かる。

『文会録』はモノと人が積み上げてきた関係の歴史と共に、モノを認識の中心に置いたときに浮かび上がってくる日本と海外の環境や文化の違い、そして会で湧き上がった参加者らの感情を記述しようとしている。

2.4 参加者へのまなざし

また『文会録』には「衆評」という言葉が多くみられる。これは『本草綱目』はもちろん、江戸時代に日本で出版された本草書にもみられない記述である。序文で幾度も繰り返されていた「四方の君子」である同好の士らとモノの真偽を「質し明める」目的が薬品会では実行されていたことが分かる。参加者同士で議論を交わし、モノの知を明らかにしようとするその様子を、『文会録』では「衆評」という単語で表現している。

その「衆評」はモノの品質を決定した場合の他に、誰もが納得のいく明確な答えが出るまでやや時間を要したであろう場合、モノの真贋を明らかにした場合、そして結果として真実が明らかにならなかった場合に分けられる。

たとえば東都の岡田養仙が出品した藜蘆では「衆評ニ曰此ノ物主品ノ中ニ在ト雖モ亦以異種奇品ト為ベシ」とある。旭山の出品物と重複したが異種奇品であると判断された為に『文会録』に掲載されたのである。会例で重複などの調整をしたいと言っていた旭山だが、その調整方法も旭山の会主権限によって決定するものではなく、非常に民主的に対応されたことが分かる。

出品物の真贋について議論している様子が伺えるのは不灰木であり「衆評以テ真ニ非ス為」とされ、『本草綱目』で火にくべても燃えない木として解説されているモノだと思われたが議論の末に本物ではないと結論づけられている。その他にも無名石草では「衆評以瓦葺ノ属ト為ス」とされ名前も分からないモノを衆評によって属を決定させている。

一方で詳細が明らかにならないまま議論が終わった様子がよく分かるのが朝鮮産の麦門冬の解説である。それは「衆評ニ曰ク」和漢に三、四種あり、そのすべてが葉に縦の文があるのだが、この出品されたモノにはその縦模様がなかったようである。植木屋で熨斗蘭と呼ぶものに似ているようだが、結局真偽は決し難かったと解説している。

古典を下敷きにしながらもその知識に疑惑を向け、植木屋などの商業の現場で得られた経験上の知識や目の前にある事実と高名な学者の知恵を中心に議論は進められていった様子を『文会録』は記述する。

また「衆評」と同時に「未詳」という言葉も『文会録』には頻繁に出現する。薬品会の中では何もかもが

明らかになったわけではない事が分かる。馬櫛榔のように名称は分かっている、誰も詳細が分からず「衆評以為詳シナラズ」とされるものもあれば、「衆評未ダ決シズ或ハ以テ雲実根ト為亦詳ナラズ」とされる無名枯木のように名すら明らかにできず推測するに留まったものも幾つかある。誰もが納得する確証がなければ名称も確定させない慎重な態度を『文会録』は記述する。

木綿并実では「或人曰木綿ハ乃今販海ノパンヤ也ト又或人曰非ナリパンヤハ薩摩絮ナリト此説未タ必シモ然ズ上説是ニ近シ」とあり、パンヤの真偽を巡って解決に至らないほど白熱した議論が行われていた様子が垣間見られる。

旭山の薬品会では参加者らの経験と実践による知識と、目の前にあるモノの実際が古典の記述上の知よりも重んじられている。『文会録』は集まった人が実際のモノを巡って行う議論の様子と、知への態度を記述しようとしているのである。

2.6 『文会録』が編集しようとしたもの

薬品会で明らかにされようとした真偽とは古典の記述や薬効だけではなく、実際の観察と経験を下敷きにすることで得られるモノの実体である。そして『文会録』の記述からは出品物は勿論、議論の及ぶ範囲も非常に多岐に渡り、最早出品されたモノらは単一の個として展示された「object」でもなければ「medicine」でもない扱いをされていることが分かる。

『文会録』ではモノを中心にして参加者らの経験や実践に基づく見解が展開されていく。モノが単独で語られていることは少なく、薬品会の議論によってモノの裏側にはモノが嘗て生育していた自然の様子が気候の変化まで含んで立ち上がる。そしてその自然の中で生活する人間とモノは如何なる関係を結んでいるのかという民俗や文化へも薬品会のまなざしが議論と共に移動していく様子を『文会録』は編集する。

『文会録』が記述し、編集しようとしたものは、古典を参考しながらも常にその記述に疑惑の目をむけ、目の前にある実際の現実と経験に則った知識を取り入れながら行われる非常に活発な意見交換の果てに徐々にモノの実体が明らかになっていく「様子」である。

薬品会とはモノの展示場ではない。博覧会でもない。また討論と議論によって知識の正確性を競い合い、古典の正否を突き詰めあう場というのも評価としては不十分である。モノを標識にして参加者のまなざしは方言や民俗のみならず海外の文化や環境にまで拡大されていく。薬品会が参加者らに与えた経験はモノの形状や質感だけではなかった。

そのような薬品会の経験を反映させた『文会録』の記述は出品物の論評や解説にとどまらず、これまでの古典の「言葉」の解釈でもない。また身のまわりの多くの事物に関する漠然とした知識の集積でもない。『文会録』は時節や気候などの自然がモノに与える変化という現象や見知らぬ土地や国の環境や文化、民俗へのビジョンが議論によって明らかになっていく様子を「衆評」などの言葉によって記述するものであるといえる。

次章からは『文会録』の一年後に出版された豊田養慶による『楮鞭余録』を考察していく。

3. 『楮鞭余録』が編集する知

3.1 序文が記述する本草学

『楮鞭余録』⁴は養慶の本草学の師である甲賀敬元によって行われた出品物の鑑定を、養慶が編纂したものだ。序跋文を除き二十三丁の短篇である。そのうちの五丁が異品図と形容された絵図である。『文会録』でも絵図は掲載されていたがそれは非常に小さく、解説と同じ箇所を描かれないわば挿絵でしかなかった。しかし『楮鞭余録』では一頁を縦に二つ切りにし、全十六図を掲載している。解説から「絵」を独立させて大々的に掲載する手法は後の『物類品隲』にも受け継がれている。その為、『楮鞭余録』は京都で行われた薬品会の実体を知るだけではなく、薬品会の目録解説書の構成の点でも歴史的な意義を持っているといえよう。

また『文会録』と異なるのは『文会録』では見返しに「衆評」と明記されていたが、『楮鞭余録』では「甲賀敬元鑑定」「豊田養慶編輯」と個人の名が挙げられている点である。

『楮鞭余録』に掲載されている養慶の「楮鞭余録凡例三則」でも「甲賀先生正其名實偏録成書命曰楮鞭餘録

上梓」とあるので『楮鞭余録』は養慶よりも敬元の意図の反映されている本だといえる。その為、薬品会そのものも会主は養慶となっているが実際は元敬の威光を借りたものであったと推測できる。また旭山の『文会録』の「衆評」とは異なり鑑定者として元敬の名しか挙げられていないことから、会の実体も民主的な集団討論や質疑応答の場というよりも元敬の発言力に依存した編集がされていると思われる。

養慶は周防国岩国藩の藩医であり京都に出て甲賀敬元について本草学を修めた。また師であり、今回の薬品会でも鑑定者として名前を挙げられている敬元は松岡恕庵に師事していたとされ、養慶は恕庵の孫弟子にあたる。養慶は京都滞在中に鞍馬貴船両山で採薬を行っていたことが序文に記されている事から、実際に山河を巡るフィールドワークの経験が豊富であった事が伺える。

序文を読むと養慶を評する言葉に「本草癖」という表現が何度か登場する。屈玄珪の序文には「昭代文明有稻生若水松恕庵二先生者出始繼烈山大貴二皇之業本草之学復命于吾」「東方焉後世談名物論薬性者皆適従於二先生其功豈不偉哉」と稻生若水や松岡恕庵が作り上げた「本草之学」とし、その業績を讃えた上で養慶を「本草癖」と評している。

若水は「江戸時代を通じて最大規模の本草一博物書」ともいうべき『庶物類纂』を編集した人物であり、恕庵は『詩経』に出てくる本草類の名称の解釈に悩んだことから若水に弟子入りし本草学を学び始めた学者である。恕庵は後に幕命によって本草の薬効調査をする和薬改会所に加わる。その他にも飢饉のための対策にも積極的に関わり、数多くの実地見聞を行った人物としても知られる。二人とも本の言葉や風土に目を向け、実際に足を向けることで「救荒」や「日用」をキーワードに日本独自のモノや環境、方言、民俗にまで言及していく「日本本草学」を開拓した人物である。序文を読む限り「本草癖」というのはそのような本草学の偉人たちの系譜を受け継ぎ、数多くのモノの生態や形態を日本の自然や文化と共に探求することに精力を注ぐ人物の事を指すもののようである。

また二人の人物から寄せられた『楮鞭余録』の序文ではモノを表現する言葉は「天下之庶物」「四方品物」、そして「草木金石虫魚禽獸」である。そして「博雅之君子草木金石虫魚禽獸之異品以便畜眼」とあり、薬用であることに拘ることなく四方に存在するモノを蒐集する人々が集う場所として薬品会を設定している。それはただのモノではなく「異品」、つまりは珍しいものであることが求められていた。

凡例では養慶は「天下之品物其無窮」とこの世に溢れるモノの種類には果てが無く、その枚挙のいとまなさに自分個人の力では到底全ての見識を得ることはできない事を語る。そして「四方庶物辨真偽」と書かれていることから「本草之学」を嗜む養慶の目的は諸家の書物に書かれたモノの実物を実際に見て名や異同を確かめることにある。名を知り、異同を判別し、真偽を鑑定しようとする目的は旭山と変わらず、できるだけ多くのモノを会に集めようとする思惑も変わらない。

しかし旭山との違いは「本草之学」という言葉が繰り返し用いられているところにある。養慶と敬元は『救荒本草』の和刻や『用薬須治』などを世に送り出している恕庵の系譜に位置し、それが序文でも強調されている学者である。日本の本草学の立役者ともされる人物の教えを直接受け継ぐ学者達の間では既に天下に存在するモノの実際の姿を知り、その形状を的確に識別しながら方言による名称を問うモノの性質を究明していくことを「本草之学」と位置付け、その学問を追及する手段の一つとして（仁や文などのような朱子学的哲理を持ち出さずとも）薬品会が開催され始めていたことがこの『楮鞭余録』から分かる。

この養慶の薬品会は旭山のように前もって開催案内の引き札を配布した様子もなく、参加者も幾人かは旭山の会にも見られた人物がいるが全国に渡っているわけではない。旭山の薬品会と比べればやや熱気に乏しい印象を受ける。近しい学派の間で行われた内輪の会であると考えるのが妥当だろう。

しかし（出品が薬用に拘ることなく多岐に渡る点は旭山の薬品会と同じだが）養慶の薬品会で注目すべきなのは、開催の前段階から「薬用には拘る事無く多くの分野に渡るモノ」を蒐集し、それが「本草之学」と自覚していたということと、そして特に「異品」に注目していた点である。出品物には風鳥、帯箭鳥、鯛ムコノ源八、ハギウオ、サカテザメなど動物類が非常に多く、化石類にも及んでいる。その他にも但馬島に漂着した夷果や馬尾蜂など、珍品異物が数多く出品されている。

『楮鞭余録』の序文からは異品が注目されていたことと、薬物であることに拘ることなくモノを観察し、知を得ていく学問を本草学とする気運が育ちあがりつつあることが分かる。

3.2 記述される「土地」

異質なモノが多数出品された養慶の会の解説書である『楮鞭余録』ではモノの品質や形状、そして産地に関する情報が『文会録』に比べて詳細だ。特に特徴的なのが産地である。

『文会録』では「漢種」や「和種」、「日光産」など非常に大まかな書き方で済まされており、産地は特に言及されないポイントであった。しかし『楮鞭余録』では磁石の解説では「中品ハリスイ石ト云下野ナス野殺生石ノ東一里許ニ小山アリ皆磁石ナリ」と「一里」や「小山」などの、その土地の特徴や状況を表す単語が登場する。その他にも海鷄頭は「防州岩国大畠ノ鳴戸ニモ出」、羚羊角には「伊吹山ニ出ト云」「熊野新宮ニ行道河アリ此川ノ両傍ノ木ニ角ヲカケテ子ムル」、山椒貝は「紀州弱浦」など非常にローカルな地名にまで産地を限定し、記述する。そして「一里」のように距離を感じさせる記述や、熊野新宮に行く道に河があるなど実際の経験を彷彿させる解説が『楮鞭余録』には豊富である。

『楮鞭余録』が記述する産地とは「唐」や「日光」のような包括的な概念の土地ではない。「伊吹山」や「熊野新宮」のような具体的な地名を伴う固有の土地であり環境なのである。このような経験に裏打ちされることで現実感を伴った産地へのビジョンがモノの裏側に広がっている。そして図まで描かれた馬尾蜂は「元文五年庚申六月濃州岐阜洪水大風ノ後コノ虫多ク化生ス名ヲ知モノナシ」とあり、異形のモノがどの土地で如何なる時期に発生したのかまで言及する。

『楮鞭余録』が目目し、「モノ」の解説の中で記述しようとしたものは、生物が生育し固有の環境と地形を有した「土地」である。

3.3 再編集される古典

『楮鞭余録』では『本草綱目』を筆頭に『三才図絵』や『典籍便覧』、『福州府志』などの古典からの引用が非常に多い。また「若水翁曰」「恕庵先生ノ説」というように過去の偉人の説によって解説が補完される場合も多い。

旭山は「衆評」という言葉を繰り返し用いることによって薬品会の会場内で行われていた議論の様子を『文会録』で記述、編集しようとしていたが、『楮鞭余録』では薬品会の様子ではなく目の前にある「モノ」の実態を如何に解説するかに重点が置かれている。

海膽殻では「福州府志曰海膽殻図如孟外結蜜刺内有膏黄土人以為醬按スルニ防州岩国黒磯ノ海中一種ノウニアリ色青刺ヤワラカナリ漁人海桃ト云」と『福州府志』の中での記述を民俗も踏まえて前置きした後に、実際のモノの形と名を解説する。

特に石弩の項目では「肅慎国ノ砭石ナリ肅慎国ハ今ノ北高麗ナリ彼地ニテ獵スル時此石矢ヲ以テス」と外国の歴史をなぞり文化をおさえている。そのうえで「今出ス処ノモノハ出羽土佐ノ産能州及ヒ南部山中円野ノ間時々有之上品ノ者ハ體水精ニ似テ亀紋有……（中略）……土人傳フ神イクサノアル時空中ヨリフル靈物トシテ守ニ用ユ」と出品された実物の形状と日本の一地域に暮らす人間がそれをどう扱い接してきたのかという民俗学の観点に解説は及んでいる。

民俗に言及している出品物は多く、この他にも「山人搾油外科家ノ用ニ入」とされる阿勃参、「里人採テ薪ニ雜ヘテ賣」とされる釣藤鈎などがある。モノを標識としながら日本のみならず海外の自然や環境や民俗へと記述のまなざしを移動させ、ビジョンを描いている。

『文会録』でもモノと人、自然の関係を記述しており、『楮鞭余録』もそれを受け継いでいる。しかし『楮鞭余録』では「『三才図絵』曰」「『福州府志』曰」など中国古典や偉人の説を前置きし、その後に出品物と参加者らの知見が記されることが多い。それは古典の追記作業である。『楮鞭余録』は目の前にあるモノの実際とそのモノにまつわる現代の知見を、古典の知と併せて記述することで古典を再編集し、かつ当代のものへと知を更新させていこうとしている。

3.4 日本と世界へのまなざし

『楮鞭余録』の編集で興味深いのはモノによって古典の知が実体化されていく様子である。そして真何首鳥では「漢渡ノモノ真ナリ」、朝鮮人参では「朝鮮ヨリ来ルモノニシテ性味宜」、未定葉では「或人園中ニ唐ヨリ

渡ル所ノ龍眼ノ種ヲ植レハ此木」と解説されている。また夷果は「コノモノ唐ヨリ薬ヲ入来ス置ノ中ニ偶」あったモノであり、『楮鞭余録』には舶来品に関する記述が非常に多い。『本草綱目』のみならず『三才図絵』や『福州府志』など多くの古典を参照しながらモノの実態を記述していく『楮鞭余録』には、海外の国々を歴史の変化と共に理解しようとする「歴史も含んだ外国へのまなざし」が広がっている。

従来の研究ではさほど注目されてこなかった養慶の薬品会と『楮鞭余録』だが、珍奇なモノが数多く出品されている事と異国への関心という点において、薬効だけでなく前時代の若水や恕庵が抱えていた藩命といった公務のしがらみや影響からも脱しかけているこれからの本草学のあり方と、外国という巨大な存在を見つめると同時に日本の一地域といったローカルな場所にまで視線の照準を合わせていく本草学者達の世界観を論じる上で非常に意義深い会であり書物である。

恕庵が追求した救荒や医療のような実用的な展開を求めることなく「異品」を蒐集し、民生日用などのテーマが決められないまま研究と討論と解説が行われることで、学問が委縮することなく発展していく本草学の可能性を『楮鞭余録』は示唆している。内輪だけの小規模な会であるが、モノを標識としてローカルな土地にまで切り込むミクロへのまなざしと、日本と貿易を行いモノを提供する外国にまで至るマクロな世界像へのまなざしを『楮鞭余録』は古典の知の後に現代の学者らの知見を付け加えていくという記述の手段によって編集する。

古典の知を現実の「モノ」によって再構築するだけではなく、モノを標識としてミクロとマクロへの「まなざし」が同時に提供される環境として薬品会は機能している。そのまなざしの解像度はフィールドワークという実際の経験によって格段に向上している。またまなざしが移動する方向はモノが生育する季節や風土によって変化する自然環境と同時に外国の歴史にまで至り、モノを霊的に崇めている人間の共同体へも座標を移していくのである。

薬品会では「モノ」とこれまでの人の「経験」によって参加者らを取り巻く古典の知を読解する一方で、自然や民俗、歴史を含んだ巨大な世界から微小な共同体の詳細まで縦横無尽に移動するまなざしが形成されていく。

養慶の薬品会の知を編集した『楮鞭余録』ではモノは認識の手段でありながら標識となっている。モノを標識としながら移動する記述は日本や外国を俯瞰するほど拡大する一方で日本のローカルな部分がクローズアップされるほど微細な解像度を持つものでもある。

『楮鞭余録』が編集した知とはモノを標識としながら古典を問い直すだけではなく、外国をその歴史ごとと俯瞰しながら日本を更に詳細に見つめる二重の視野であった。

4. おわりに

『文会録』と『楮鞭余録』はともに、モノの実際と薬品会の参加者らの知見から古典の知を更新しようとしている。そしてモノが嘗て生育していた自然の様子が気候の変化まで含みながら記述され、そしてその自然の中で生活する人間とモノは如何なる関係を結んでいるのかという民俗や文化へと記述は移動していくのである。

薬品会ではモノが中心的なテキストであり、同時に参加者らの認識の標識となる。モノを標識にして参加者のまなざしは拡大されていく。それは見知らぬ土地や国の環境や文化、民俗への興味を起こさせるものであった。そのような好奇心と興味によって起こる議論が活発化した様子を『文会録』は記述し、海外へと視野が開かれていくのと同時に日本の細部へと向けられていくまなざしでもって『楮鞭余録』はモノの知を編集していく。

この後、江戸で開催された薬品会の知を編集した『物類品隲』が出版される。この『物類品隲』には非常に多くの人物が身分や職業に関わらず登場し、彼らの薬品会以前の経験がモノの解説と共に記述されていく。またモノも唐種や朝鮮種だけでなく、オランダ産のモノがオランダ語の解説と共に記述されていくことも注目される。

よって薬品会での様子を編集しようとし、モノを中心に日本を再確認しながら海外の環境や歴史にま

で記述を広げた『文会録』と『楮鞭余録』は、薬品会という画期的な催しの様子を知ると同時に、当時の学者たちがモノのどこに注目し、そこから如何なる世界観を築き上げ、記述しようとしていったのかを知る知の編集の系譜の手掛かりとなる本であるといえる。

註

- 1 西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本④』1999年 紀伊國屋書店 p133
- 2 本稿では恒和出版から出版された『博物学短編集下』に収載された「文会録」の記述を引用している。原本は国立国会図書館に保存されている。
- 3 李時珍『本草綱目』人民卫生出版社、1979年、730ページ
- 4 本稿では恒和出版から出版された『博物学短編集下』に収載された「楮鞭余録」の記述を引用している。原本は国立国会図書館に保存されている。

参考文献

- 磯野直秀「薬品会・物産会年表（増訂版）」『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』29号、2001年 p55-p65
- 上野益三『博物学者列伝』八坂書房、1991年
- 木村陽二郎『江戸期のナチュラリスト』朝日新聞社、1988年
- 栗野麻子「平賀源内と東都薬品会一本草学のネットワーク」『史泉』112号、2010年、p10-p19
- 山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界上』思文閣出版、1995年、p138-p173ページ
- 城福勇『平賀源内の研究』創元社、1976年
- 杉田玄白『蘭学事始』片桐一男翻訳、講談社、2000年
- 杉本つとむ『江戸の博物学者たち』講談社、2006年
- 戸田旭山「文会録」上野益三解説『博物学短編集下』恒和出版、1982年、p8-p68
- 豊田養慶「楮鞭余録」上野益三解説『博物学短篇集下』恒和出版、1982年、p72-p132
- 西村三郎『文明の中の博物学上』紀伊国屋書店、1999年
- 西村三郎『文明の中の博物学下』紀伊国屋書店、1999年
- 平野満「薬品会・物産会の基礎的研究—富山藩の盆栽月次品評会「日新会」と富山藩薬品会—補論。『奇草小図』の印刷—金属活字』『明治大学人文科学研究所紀要』48号、2001年、p413—p428
- 平賀源内『物類品隲』杉本つとむ解説、八坂書房、1972年
- 平賀源内『平賀源内全集』入田整三編、平賀源内先生顕彰会、1932年
- 吉見俊哉『博覧会の政治学 まなざしの近代』講談社、2010年
- 李時珍『本草綱目』人民卫生出版社、1979年